

もはや東南アジアの国は日本の下請けではない。

ゴールデンウィークの4月29日～5月3日の機内一泊を含む4泊5日の日程で家族4人、マレーシア連邦サバ州の首都コタキナバルに出掛けてきました。平成5年7月に一度訪問しているのので二回目になります。

当時のコタキナバルには大手商社のニチメンの事務所が有り、サバ州の木材製品（合板を含む）を日本に輸出する為の拠点になっていました。16年前は日本人の木材関係者は殆どニチメンの事務所には一度は寄り所長にサバ州の木材の相場等の話を聞いたりしているのを、小生は覚えています。

当時の宿泊先はコタキナバルのハイアットホテルでした。ホテルの回りの環境は極一部が整然としているだけで少し離れたらまるっきり田舎でした。

当時の様子を窓から写真を撮ったのが右の写真です。→

16年前に訪問したのは、商社の人
がコタキナバルから車で4～5時間位
の所（ケニンガウ）にアガチス原木を
製材しているシッパーが何社か有る
から是非見に行かないかと誘われて出
掛けました。ケニンガウに有りました
製材工場に行くまでの道は、ガタガタ
で悪路だったのを覚えています。

昼間工場で値決め等の打ち合わせを
して夕食をコタキナバルの市内で一緒
に食べようと誘われ一緒しましたが

当時夕食を頂いたレストランはそんなに美しくなかったと記憶にあります。現在のコタキナバルの発展は目を見張る物が有ります。当時の市内地をオールドタウン。今の郊外に開発された新しい市街地をニュータウンとしたら、新しい街の面積は当時の10倍以上に街が大きくなっていると思います。又郊外に建てられたホテルは一流ばかりです。大学等の教育機関も整備され、デパート、ショッピングモール等のお店も整備されていました。

多分現在の州の収益の大きな部分を占めるのは観光ビジネスです。動物園ではマレーシアの貴重生物のオランウータンも観光客と一緒に写真を撮れる様調教され外国人観光客からお金を継続的に落としてもらう仕組みが出来上がっています。 ↓オランウータンと小生と妻

↓ オールドタウンと言う飲食街



以前のサバ州は日本の木材の大事な輸入先でした。まだ多くの木材資源は残っていますが、もう彼らは安く木材資源を輸出しなくても経済を発展出来る仕組みを作り上げたのです。それが観光立国だと思います。

日本は大震災に遭遇し大変な時代に入っていますが、昔の様に木材資源を浪費する時代は終わった事を一番に考え国内の有り余ったスギ・ヒノキを使っていく義務が有ると感じた旅行でした。

広葉樹シーズンが終わりました。

昨年9月から始まった今シーズンの広葉樹シーズンは5月27日と6月29日の二回旭川にて開催される銘木市で完全に終了しますが、4月の市でほぼ終了したと言って良いと思います。今シーズンの特徴は幾つか有ると思います。

- 1、優良材が何時の市に多く出品されるのかが行ってみなければ全然解からない傾向が有りました。
- 2、日本固有の樹種の仲間で昨年比価格が倍になった樹種が有ったことです。
- 3、タモとナラの相場が逆転した年であったと思います。
- 4、相場感を把握するのが凄く難しかった。
- 5、細い原木と太い原木の差が益々大きくなった。

まず1を説明します。昨年九月に開催された最初の市にはイチイ・バッコヤナギ原木の優良材が珍しく多く出品されました。こんな事は私の30年のキャリアで初めてでした。過去の経験ではイチイ・バッコヤナギの優良材が出品されるのは12月か1月でした。次に2の日本固有の樹種で昨年比価格が倍になった樹種はカツラ材です。優良なカツラ材の産地は日高地区です。昨シーズンは日高沿線で生産された国有林のカツラ原木は約500立方でした。今シーズンは16立方です。 $16 \div 500 = \text{昨年比} 97\% \text{ オフの} 3\%$ です。こんな少ない生産量だから価格が倍になってしまったのです。次のシーズンはカツラ材を扱えるかは凄く不透明です。もしかしたら来年以降でカツラの優良材を扱えないかもしれないと思います。

次に3のタモとナラの相場が逆転した年で有った事も今年の大きな特徴だと思います。タモとナラを単純に比較するのは凄く難しい作業です。比較するのに2つのキーワードで考えます。①乾燥の難しさと②芯の出来です。

- ① 乾燥が難しいというのは、ナラとタモの板目の板を製材します。

ナラの板は手入れ(ワレ止め処理)をしなければ木口のワレ・表面のワレが生じます。タモもワレ止めの手入れは必要ですが、ナラほど気を使いません。

- ② 芯の出来と言うのは材木屋以外の方は理解する事が難しいと思いますが、簡単に言えば芯節と水ワレの問題です。芯節が出るのはタモもナラも同じですが、芯が泳いでいる(芯が真っ直ぐに通っていない)時芯節の影響が大きいかそれとも小さいかと言う事です。ナラはタモより芯の泳ぎが深いです。又両方の木口のワレが有っていない時、ナラの大径原木は水ワレを生じる可能性はタモより各段に高いです。タモとナラは大体同じ位の値段の木材商品だと思えますが管理がしにくい面で本来ナラの方が、少し高く付くのが普通だと思います。今年タモがナラの相場が逆転しましたが、又ナラの人気が近い将来タモより上になるかも知れません。

次に4はこう言う話です。今年の北海道旭川の銘木市は元落ち率が凄く少なかったのです。この元落ち率が少ない時は1.5%以下の市も有りました。出品されている原木は良質材ばかりでは有りません。低質材も凄く多く出品されています。目荒材・大曲がり材・大節材と欠点が目立つ材も凄く多く出品されていました。しかし結果としてほぼ全量に買い手がついているのです。広葉樹に携わる関係者は、今年の秋以降の次の広葉樹シーズンはもっと今シーズンより仕入れが難しくなると予測しているのでしょう。それで各回の市のライバルが凄く多かったと思います。

最後の5ですが、太い原木が凄く少なくなって来ています。タモもナラも全ての樹種で径級80センチクラス原木は全体の1%も無かったと思います。3月に旭川に出品された長さ7.8メートル径級80センチのタモ原木は二番札(小生)に30%近い値段差が付いていた事を市の関係者から教えて頂きました。落札した業者はどうしても必要だったのでしょう。全ての樹種の太い良質原木価格の天井が無くなったかも知れません。



第9回勉強会

3月12日に臨時に服部商店第9回勉強会を開催しました。前日に東日本大震災が有り中止にしようかとも迷いましたが、地方の材木屋さんが是非来たいからと前日にお電話頂いたので決行しました。



今回は日本固有の樹種セン原木の製材を見て頂きました。製材方法は何時もどおり木に優しい方法(本木に割る)です。本木とは外から見えない芯の泳ぎ具合を想像して一番悪い所に鋸を通す作業です。一番悪い所に鋸を通す事により、欠点を確認しながら製材が出来るのです。大抵の方は〇〇ミリと〇〇ミリの板を取りたいと思って原木の側から鋸を通して製材しますがそうすると中から予想しない欠点が出てくる事が多々有ると思います。その時悔しいと思うでしょう。小生が何時も言っている木に優しい製材方法を取って製材したら、失敗する確率が激減すると思います。一連の弊社の製材方法はマル秘ですが、何故服部商店の持つノウハウを皆様提供しているのか、不思議に思いませんか。其れはエンドユー



ザーのお客様に価格競争ではなく、品質競争をしなければ材木屋の居場所が無くなると小生は予測し、現実にもなるのではと持っているからです。特に我々の様な中小零細業者の材木屋は自然の恵みである木材『無垢の木材』に感謝し、其れを正しい形と方法でエンドユーザーの消費者の皆様にお届けする責務が有るのです。結果としてお客様の満足度によって報酬が決定されるのです。今の多くの材木屋は、原価が幾らの商材を買って来て、競合ライバルの業者とマージンの削りあいの競争しているのでは全く社会的責任を果たしたとは言えないと思います。

以上の材木屋の社会的責任の話は勉強会当日お話しませんでした。現実には東日本大震災が起こった現在、材木屋として何が出来るのかを自分で問いただしたとき天然の素材を扱う喜びと責任を果たすのが我々材木屋の仕事だと特に最近思っています。

産地の違いは何か

島物（しまもの）と言う表現を聞いた事が有りますか。この表現方法を知っている方は南洋材のプロです。しかし現在南洋材を扱っている材木屋の若い方は知らない人が大勢いらっしゃると思いますので服部新聞に書かせて頂きます。



インドネシアの大きな面積を占めているのはカリマンタン島（ボルネオ島の南半分）です。カリマンタン島にも多くの優良品質の木材を育む産地は有ります。しかしそれ以外の地域にはもっと高品質の材を出す産地が有ります。それが島物と言う産地です。

ここでのお話はインドネシア産のアガチス材を取り上げます。私は今までアガチス材を服部商店に入社してから約28年間扱ってきましたが一番良い産地はスラウェシ島の東に有るオビ島産のアガチス材だと思います。この産地はアガチス特有の針葉樹の持っている欠点『アテ』が少なく、木味（色）も良く、これぞアガチス色と言う産地です。次にハルマヘラ島の材です。オビ島産のアガチス同様アテは少ないですが、多少シラタが深いです。次に良いと思った産地はスラウェシ島のポソもしくはパルと言う産地でした。それ以外にカリマンタン島の東に有るマレーシアとの境界近くに有るタラカンと言う産地です。この5つがアガチス材の優良な材を育む産地です。

島物（しまもの）はタラカン以外の産地を意味しています。カリマンタン島以外の産地の材を島物と呼び、高い評価をしているのです。仕入先との交渉で今回の産地は何処ですかと話をする機会が今から15年以上昔は当たり前の様に有りました。その当時、島物産で原木の鮮度が新しかったら、失敗は少なかった記憶は今でも有ります。又お客様に島物のアガチス材でお小言を言われた記憶は余り無かったとも記憶の奥に有ります。それが現在インドネシア及びマレーシアから輸入されているアガチスの製材品とアガチスの原木は昔の島物の商品と比較すると全く較べられない商品になっています。アテの欠点は今でも厳格に守られていますが、巾広材『34ミリの板なら以前は巾420ミリ上の板で全くアテの無い材が昔は1バンドルに5～6枚程度は入っていました。』は、現在はゼロです。

島物のアガチス材とそれ以外の材の違いはお客様が材をモルダーに通した時小生に今回の材は凄く物が良いなどお褒めの言葉をお聞きしたことを記憶しています。島物の材はモルダーを通した時、ケバタチが少なく何の作業もせず次の作業の塗装に掛かれ一つの段階を飛ばせたけれど、それ以外の産地の材は、アテが無くてもケバタチ、サンドペーパーを掛ける作業が必要でした。

こんな高い評価の島物の材ですが現在の入荷は止まっています。又島物と言っても以前の島物とは全く違います。仕分けその物を少し甘くしたら品質は愕然と落ちてしまいます。

産地は大事な仕入れのファクターですが、これだけ木材資源が枯渇した現在材木屋の仕事『目利き技術と仕訳け技術』を駆使する以外に生きる道はないと思います。ここでアガチス材を取り上げましたが、他の樹種も同じです。米材針葉樹・広葉樹・北海道産広葉樹・ロシア中国産広葉樹・アフリカ材全ての木材資源の買い付けに産地のファクターは大事ですが、それ以上に木を見れる目が大事だと思っています。